

日曜日の車内で

下平尾 哲

日曜日の昼過ぎ、電車は空いていた。ロングシートに一人座れる余裕があったので腰をおろす。ちよっぴり幸せな気分になる。次の駅で、かなり高齢の男性が乗ってきた。ちよっと惜しい気がしたが、老人に声をかけて席を譲る。「いや、いいですよ。ちよっとの間ですから」老人は、穏やかな笑顔で応じた。明るいブルーのジャケットが良く似合っている。だがステッキで体を支えている。衰えは隠せない。

「座らしてもらうで」横にいた若い男が私が空けた席にどさっと音を立てて座り込んだ。

「おつ儲けたな。誰か席空けてくれや。俺ら夜の仕事で疲れてるんや。年金で遊んでる年寄りとは違うんや」いっしょにいたもう一人が辺りを見回した。座った男は茶髪、立っている方は、スキンヘッド。チンピラと呼ぶのがピッタリの男たちだ。

老人は私に苦笑してクビを振って見せた。横に座っていた中年の婦人が私を見上げる。私は視線をそらせた。近く

の乗客たちは、私を好奇の目で見ている。私は周囲の視線をはね返したくなかった。

「俺がこの人に譲ってあげた席や。お年寄りを座らせてやれよ」腰が引けた声だった。

「おっさん。この席の権利ゼニ出して買うたんか。自由席は早いもん勝ちやろうが」

茶髪は予想もしていなかった理屈を言った。反論のことはが思いつかない。

「何やねん。返事せんかい」スキンが厚い肩を私の腕にぶっつけた。私は、スキートのバランス感覚を維持するために、つり革は使わず立っていたので無様に倒れた。私の頭の中でスキー競技のスタートの号砲が鳴った。

スキンに真正面に向かった。相手はボクサーのように構えた。私は格闘技は知らない。スキーで鍛えた瞬発力があるだけだ。左手はポケットに入れたまま、相手の出方を待つ。

「ここへ座りなさい」茶髪の横に座っていた婦人が立ち上がるのと、スキンの腕をつかんで引つ張った。婦人の力はかなり強かつたらしく、彼はシートに尻餅をつくように座った。

「なんや、おばはん。おかんみたいな真似するな」照笑いの表情にまだ幼さが見える。横に並ぶ形になった女性が逃げるように席を空けた。

「おじん。ここ空いたやんケ。座れや」チンピラもやはり周囲の目を意識している。老人は窓の外に目を向けたまま見向きもしない。二人は脚を開いて三人分の座席を占領する。私のつかの間の戦意はもう消えていた。婦人も黙っている。電車の振動音だけが聞こえる。

「なんかむかつくなあ、おばはん。それにこのおっさんもや」茶髪が苛立ち始めた。ハンパな形で終わったゲームが不満らしい。

「年寄りはな、俺らの税金で食わしたってるんや。ええ歳して派手な格好しやがって」

「バカにするなっ！」老人が一喝した。チンピラたちはキョトンとしていたが、徐々に獐猛な目に変わってきた。彼らは私の方に目を向けた。私も睨み返す。

「なんや、その目は」茶髪が立ち上がった。スキンが老人のステッキを蹴飛ばした。老人は大きくよろめいたが、つり革を握った手は離さなかった。

「何をするんじゃ」老人がステッキを振り上げた。私は老人を抑える。

「おまえらエエ加減にせんか。この席空けてどこかへ出て行け。オトナをなめるなよ」

自分でも驚くほど迫力のある声が出た。茶髪が私の胸ぐらをつかんだ。私はポケットに入れていた左手を出した。

右腕で老人をかばい、左手で茶髪の腕をつかんで突き放した。

「ヤクザや！」茶髪は私の左手を見て凍りついた。スキンはガクンと膝をついた。

「すみません」二人は頭を下げた。彼らは小走りで後ろの車両に向かう。車両の連結部のドアの前でチンピラは精いっぱい抵抗をして見せた。

「俺らはな。ヤクザみたいにガラ悪うないんじゃ」それだけ言って後ろの車両に消えた。

「ありがとうございます」と礼を言った老人の顔は少し強張っていた。

私の左手は小指がなかった。スキーの衝突事故でなくしたのだ。何も言わずに左手をポケットに入れた。婦人の表情も硬い。車内は再び静かになった。前の席は空いたままだ。

電車が終着駅にすべりこむ。乗客たちは、ほっとした顔になってドアから出て行く。私も人混みの中に紛れ込んだ。さっきの婦人が老人の手を引いて歩いているのが見えた。